

高山の歴史：城下町時代

高山の歴史は、飛騨国の人里離れた安川村から始まる。本州中部の山間部に位置する飛騨は、政治権力の中心から孤立していた。1550年、三木家がこの地域の権力を掌握した。彼らは1558年から1585年まで飛騨を支配したが、金森家の当主である金森長近（1524-1608）の軍に敗れた。

長近は1588年に高山城を築き、飛騨の大名としての地位を確保した。その後の30年間は天下分け目の争いに参加し、重要な意味を持つ関ヶ原の戦い（1600年）では勝利側に立って戦った。1603年に勝者の徳川家康（1543-1616）が将軍に就任すると、長近はその恩賞として飛騨藩の存続を許された。

金森家の城下町は、武士は江名子川沿いの城の近くに住み、商人は城から離れた宮川沿いに住むことを命じられた。飛騨の商人は主に鉱山や伐採、養蚕などで生活を支えていたが、小さな産業もたくさんあった。

1692年、金森家6代目当主の頼時（1669-1736）は、他藩に転封となった。それから3年間に、高山城は解体され、幕府が飛騨を直接支配することとなった。金森家の家臣も皆、移転させられ、彼らの権力の地位は、江戸の官僚や残った商人たちが引き継いだ。江戸幕府の直轄地となり、高山は黄金時代を迎えた。